

板野中学校 同和教育だより

MY SKY No. 1

マイ・スカイ

2000年4月18日(毎月第1・第3火曜日)発行

発行者

編集・文責
駐吉成正土
副次本知己

詩画集が全国で好評



18日から小松市市立図書館で作品展を開催する原田さん(中央)同市中郷町の里

県内で初の作品展

知的障害持つ原田さん

18日から
小松

詩や絵画制作に取り組んでいる小松市巾郷町の知的障害者、原田大助さん(左)が、十八日から同市小松高町新海の市立図書館で県内では初めての作品展を開催し、皆さまに詩画集三冊を出版して全国で好評を博している原田さんは、個展を前に作品の仕上げに追われている。

出版されるのは、養護学校時代に作った花、動物、人物画と詩十五点、大きいもので縦九十センチ、横六十センチ、小さいもので縦十五センチ、横十五センチ。現在、大隅門橋を題材にした絵を制作中で、仕上げが間に合えば出す。

原田さんは群馬県生まれ、九八年三月に石川県立錦城養護学校高等部を卒業。昨年一月に父親・嘉蔵さん(八三)の故郷である小松市に一家で引っ越してか

らば、知的障害者小規模道の星一(同、九六年)「好て所集所」みやま園(同、好きやうて)「小学館九八年」を発行した。全国ネットのニュース番組で取り上げられたこともあって計二万部以上売れている。今回の作品展は、原田さんの創作活動を助けた同図書館が企画を依頼した。石川県内では今回が初めて、四日(は朗館)入場無料。

母、母親の様子さん(同)は「多くの人に見に来てほしい。今後、作品が増えれば、徳島を題材にした作品だけを集めた個展を開きたい」と話している。

作品展は同図書館一階郷土資料室で五月七日(土)午前十一時～午後六時、自曜と二十九、三十、五月三十一日(は朗館)入場無料。

新学期が始まり、また中学生になり、みなさんどうでしょうか？楽しい毎日は送られていますか？

今年度も、^{よしなり}マイスカイを吉成・^{つきもと}次本で作っていきましょうと思いますので、一年間よろしくお祈りしま〜す！



◇「^{だい}大ちゃん」です。みなさん行ってみませんか？

さて、今年最初のマイスカイということで、いろんな先生方にコメントを寄せてもらおうと思うのですが、まだ準備が十分にできてません。すみません！ということで、実は上の記事(徳島新聞4/15)についてお知らせをしておこうと思います。

実は本文中に出てくる「……教師の協力……」の教師の一

人が、山元加津子先生といひます。以前マユスカイに大ちゃんのことを載せ、そのことを山元先生に伝えると、こんな手紙が返ってきました。

お手紙、御本(マユスカイ)ありがとうございました。

子供たちのこと、大好きで、たくさんの方に子供たちのこと、

知っていただきたいなあって、いつも思っています。

大ちゃんや、他の私の大切なお友達のお話の本

「たんぽぽの仲間たち」読んでいただけますか。

どうぞお身体大切にお過ごし下さい。

山元加津子

ここで、その大ちゃんのことについて、3年ぶりにマユスカイで紹介したいと思います。

さびしいときは 心のかぜです

さびしいときは 心のかぜです

せきして はなかんで

やさしくして ねてたら 一日でなおる

その時、私は元気がありませんでした。私と仲良しなかよしの大切な友人が、とてもつらい状況じょうきょうにいてさびしがっているのに、私は何もできずにいました。心配をかけてしまうから、大ちゃんの前では元気でいようと思うのに、いつか溜め息ためいきをついてしまって、「山もっちゃん、どうした？」と大ちゃんに聞かれてしまうのでした。

その時はまだ、大ちゃんと二人で詩を作りはじめた頃ころで、大ちゃんは遠慮えんりよがちに言いました。「さびしいときは心のかぜです」「えっ？」と私が聞きなおすと、少し時間をおいてから、大ちゃんは「せきをして、はなかんで、やさしくしてねてたら、一日でなおる」と言いました。

私はその時の情景じょうけいをはっきりと覚えています。とてもやさしい目をして、これ以上やさしい顔はできないと思われるくらいににっこり笑って、大丈夫だいじょうぶというふうに私にうなずいてくれたのです。

友人にこの詩をすぐに送ると、友人は「今は大変だけど、時間がたったらそのうち心こころの風邪かぜはなおるよ、と大ちゃんに言われたような気がして、心がとても楽らくになったの」と、また手紙をくれました。

「大ちゃんの詩はすごいね。大ちゃんの詩はやさしいね。友だちが元気になったよ。友だちのことを心配してくれてありがとう」と大ちゃんに言うと、「山もっちゃん、元気はいいね」と大ちゃんは言いました。その時はわからなかったのですが、大ちゃんはきっと、私が元気をなくしていることを心配していて、それで「友だちが元気になった」とうれしそうに話す私のことを「元気はいいね」と言ったのだと、今わかりました。私、名前だけは教師でも、教えようとか、指導しようとかいう気持ちを持つことが、どんなに思い上がった考えかということが、大ちゃんといるとよくわかります。大ちゃんこそ大きくて、やさしくて、広い目で私をいつも見ていてくれたのだと思います。

人は、人と人の関係の中でこそ育つのですね。そして、その関係は決して、押しつけだったり、一方的^{いっぽうてき}だったり、支配的^{しはいてき}だったりしてはいけないのですね。それでは気持ちは出せないし、好きという気持ちにも、きつとなれないのではないかと思います。私と大ちゃん^おがその時、もし一方的^おだったら、「さびしいときは心のかげです」という詩は生まれなかったと思います。

そしてこの手紙と一緒に送られてきた「たんぼぼの仲間たち」にも、ステキな出来事がおさめられていたので、紹介したいと思います。読んでいる間^{あいだしゅう}中、うれしくなったり、ほのぼのしたり、悲しくなったり、感動したり^おの連続でした。どうぞ読んでみてください。

きいちゃんの浴衣^{ゆかた}

職員室にいと、きいちゃんがとつともうれしそうな顔をしてとびこんできました。きいちゃん^おはいつもどちらかといえば元気のない^{いんしょう}印象をあたえる子だったので、驚いた^{おどろ}たずねると、「お姉ちゃんが結婚するの。私、結婚式に出るのよ」と言いました。

どんな洋服^{ようふく}を着て出ようか、結婚式ってどんなかしらとそれは楽しみにしていたのでよかったなあと思っていた矢先^{やさき}、ある日、教室で泣いているきいちゃんを見つけました。聞けば、おかあさんがきいちゃんにお姉ちゃんのために結婚式に出ないでほしい、と言ったとのことでした。「私のことが恥ずかしいのよ。おねえちゃんばかり可愛い^{かわいい}のよ。私なんか産まなければよかったのに」と言って泣くのです。これがきいちゃんの本心ではないと思うのですが、きいちゃんも、そうきいちゃんに言われたお母さん^おもとても傷ついているだろうなあと思いました。お母さんは、決してきいちゃんよりお姉さんを可愛がっているのではなく、かえってきいちゃんのことばかり考えているような方

でした。でも結婚式に出ることで、お姉ちゃんが肩身の狭い思いをするのではないか、お姉ちゃんの子どもに障害を持った子が生まれるのでは、と他の人に思われるのではないかとお母さんは考えられたのだと思います。

そんなきいちゃんに私は何も言ってあげられなくて、いっしょにきいちゃんのお姉ちゃんにプレゼントを作ろうと言いました。お金がないので、さらしの布を買い、金沢の山のほうにある二俣町というところで染めをならって、白い布を夕日の色に染め、きいちゃんはお姉さんに浴衣を縫い上げました。

きいちゃんは小さいときに、高い熱が出て、思った場所に手をもっていくのが大変になりました。アテトーゼといって、手がもっていきこうとする所の前へいたり、後へいたり……なかなかその場所にいかないのです。だからきいちゃん自身は、縫い物ができるとは思っていなかったと思います。そして、私自身もきいちゃんが一人で縫い上げるのはむずかしいと思っていました。でもミシンもあることだし「とにかく作ってみようよ」と最初、提案したのでした。

でも、きいちゃんとはとてもがんばりやさんでした。毎日毎日縫っていくうちに、縫い目はだんだんと揃ってきました。私はとても驚きました。

そして、きいちゃんは学園へ持って帰ってから学校でも丁寧に縫いつづけ、それは結婚式の十日前に仕上がりました。

きいちゃんがプレゼントして二日ぐらい後だったと思います。きいちゃんのお姉さんから私のところに電話がありました。びっくりしたことに、お姉ちゃんは、きいちゃんとして私にまで、自分たちの結婚式にぜひ出てほしいとおっしゃるのです。最初はお母さんのお気持ちを思い、ためらっていたのですが、きいちゃんと相談して、式に出席することにしました。

きいちゃんのお姉さんはそれはそれはきれいで、幸せそうでした。でもきいちゃんを見て、なにかひそひそ話をしている人が何人かいるのが私には気になり、きいちゃんはどう思っているのかしら、出席しないほうがよかったのではないかしらと思ったりしていました。

そんなことを思っていたところ、お色直して扉から現れたお姉さんはなんと、あのきいちゃんが縫った浴衣を着ていたのです。お姉さんはとても清楚で可愛らしく、浴衣もとても映えてみえました。感激していたらお姉さんは、だんなさまになる人とマイクの前に立ち、話しました。

「この浴衣は、私の妹が自分の力で縫って、私にプレゼントしてくれました。妹は小さい頃、高い熱が出て、体が不自由になりました。その不自由な手で、こんなにすてきな浴衣を縫ってくれました。妹は小さい頃から家から離れて生活しなくてはなりませんでした。私は妹が両親といっしょに生活している私を恨んでないかしらと思ったこともありました。でも妹はそんなことは決してなく、私のために浴衣を縫ってくれました。今、高校生で浴衣を縫える人は何人いるでしょう。私の妹は、手が不自由にもかかわらず、浴衣を縫いました。妹は私の誇りです」

そしてきいちゃんと私を呼んで、私たちを紹介してくれました。

「これが私の誇りの大事な妹です」と……。

今になって私は、なぜきいちゃんの姉さんが結婚式で浴衣を着られたのかしらと考えることがあります。きいちゃんは家では、何もできない不憫な子と考えられていたそうです。でも、こんなにすてきな浴衣が縫えたのをご覧になった時、お姉さんはおそらくきいちゃんに対する気持ちを変えられたのではないかと思います。

たとえ障害があっても、いいえ障害を持っているからこそなお、きいちゃんはきいちゃんだということを、ご自分や家族やこれから家族になる人たちに示したいと考えられたのだと思います。

私はこの話を思い出すと、いつも涙が出そうになります。そのときとても感激したので、あまりにも感激したので、いつまでもそのことがよみがえってくるのです。

すばらしいお姉さん、そしてお姉さんの心を動かしたすばらしいきいちゃんのがんばりと、お姉さん思いの心、きいちゃんはきいちゃんとして生まれて出てきた、これからもきいちゃんとして生きていく、もし人から隠れたり、名前を隠したりして生きていったら、きいちゃんの人生はどんなに淋しいものになったでしょう。

私はきいちゃんから多くのことを教えてもらいました。

ところで、きいちゃんはある日お母さんに「産んでくれてありがとう。この世に生まれて本当によかった」と言ったそうです。お母さんは涙ぐんでそう話されました。お母さんは私に何度もありがとうと言われたけれど、私はなにもしていないし、かえってこんなすばらしい場面に居合わせてもらって、いっぱいありがとうと思いました。

きいちゃんはすごく明るくなって、自信にあふれ、和裁を習うと言いました。そしてそれを一生の仕事に選んだのです。

